

春季ソフトボール大会優勝報告

応援団長 with 先発ナイン

6月13日の予選では、園田ゼミと3対3の同点だったこと、また、決勝トーナメントでは強豪と当たることもあって試合当日は、まず1勝しようという感じだった。まさか、あんなことになるとは思ってもおらず…。

少し遅刻してしまった私は、草むらで戦闘服に身を包み(写真参照)、申し訳なさそうに、かつ颯爽と登場した。髪形にマッチしていたようで、思いのほか反響がよく、全体のテンションを上げるのに最適だった。その高まったテンションのお陰か樋口ゼミとの決勝トーナメント第1戦は6対2と快勝した。次の相手の渡部ゼミは、強豪揃いで、試合前は勝てる気がしなかった。しかし、みんなの応援やプレーヤーの頑張りもあって最終回で逆転し、5対4で勝つことができた。次の金子ゼミとの試合は、互いに乱打戦の末、最終回の堅い守備と自慢の攻撃で逆転することができ、13対12で勝つことができた。次の井出ゼミとの試合では、井出先生のバットが火を噴いていたが、それを上回る破壊力で17対9と快勝した。まさか決勝にまで駒を進めるとは誰も思っておらず、戸惑いを隠せなかった。最後の中島ゼミとの試合は、優勝したいという思いと、4試合こなしてきた中で培われた団結力があつたお陰で、苦しい試合ではあつたが10対8と優勝することができた。優勝した瞬間、いいタイミングで小野先生が登場されたこともあってみんなのテンションは最高潮になり、勢いあまって胴上げまでしてしまった。



応援団長
第5期生 松山 昌司



祝！初優勝！！

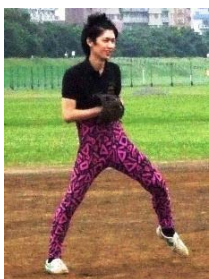
決勝トーナメントは全5試合と超ハードスケジュールであったが、参加した小野ゼミ生にとっては、忘れられない1日になった。この感動をもう一度。後輩諸君頑張ってくれたまえ。

PS. 経験者が少ない中、よく優勝できたと思う。本当に団結力というものは、凄い力を持っているのだとしみじみと感じた。



1番・ピッチャー
第5期生 飯島 崇志
(不動のエース)

2007年春は小野ゼミ史上初の決勝トーナメント進出、同年秋にはベスト4と優良な成績を残してきた。そして、6期という新たな戦力を得て迎えた2008年春、小野ゼミの力が爆発する。守備では随所でファインプレー連発、攻撃では先行されても諦めることなくじわじわと追い上げる。逆転に次ぐ逆転。まさに怒涛の快進撃であった。優勝。そこには想像もつかないほどの感動と達成感があった。



2番・ショート
第5期生 田中 照太
(商ゼミ MVP 受賞)

エグゼミ(勉強しかできない)というイメージを払拭させる。これがソフトボール大会に対する私の位置付けであった。私は気色悪いスパッツをはくという手段を取った。松山はパンチパーマにするという手段を取った。私たちは六郷土手の民の視線を完全に独占した。ある意味、作戦成功である。そのうえ、優勝までしちゃった。これを境に、小野ゼミは単なるエグゼミではなく、ぶっ飛んだエグゼミと呼ばれるようになったと聞く。



第6期生 山本 佳寛
(首位打者)

私たちのゼミは、「血を吐くぐらい厳しいゼミ」と言われている。めちゃくちゃ勉強をしているゼミであると周りの友達からは受け取られているだろう。勉強だけが小野ゼミではないということを示したいと考え、ソフトボールでの優勝を目標にした。私たちのチームはずば抜けて上手な選手などいない。平均的な選手が多かったと思う。そんなチームが優勝できたのは、団結力があったからだろう。試合中、困難な状況は何度もあった。しかし、私たちのチームは諦めなかった。互いを励ましあい、必ず優勝するという強い気持ちを持ち続けた。その結果が優勝につながったのだろう。応援にも、ほとんどのゼミ生が来てくれた。ゼミが1つになっていると強く感じる事が出来た。小野先生も応援に来てくださった。ゼミ生にとって、先生の応援はとてもいい刺激になった。小野先生に優勝をプレゼントできて本当によかった。私たちがソフトボール大会を終えて、私たちのゼミは、何事においても仲間と共に1つのことを成し遂げることが大好きだと改めて実感した。勉強もスポーツも全力で取り組む仲間がいる小野ゼミは、とても魅力的である。来年は、主力メンバーであった5期生が抜けるので危機的な状況になる。でも個人的には、6期生と今年、入会する7期生と共に優勝を勝ち取りたい。そのために、今から多摩川のグラウンドで練習をしよう。松木は、毎日、自宅で腹筋200回、縄田と宮田は、素振り100回(夜の空振りを抜く)、そして発声練習(パッション表現を豊かに)まあこんなかんじで頑張ろう!!今年も優勝や!!



4 番・レフト
第 5 期生 石川 大二郎
(小野ゼミのアニキ)

春のソフトボール大会——。

今振り返ってみると、4 年前のあの夏に浜松球場に置いてきたままの忘れ物を、取り戻すための舞台であったように思える。

4 年前と違い、球場は廃れた河川敷。観客など皆無である。それでも、私の心は青白く燃えていて、一匹の獣になっていた。

4 年前と違い、仲間は大半が未経験者。勉強好きの不健康な大学生である。それでも、苦楽を共にしてきた彼らの存在は何よりも頼もしかった。

4 年前と違い、はたから見ればお遊びのような試合内容だったかもしれない。それでも、最後に私の顔から溢れたのは笑顔だった。

私は、あの夏に流した涙を清算した。下手くそながらも頼もしい 8 人の仲間と共に勝ち取った栄光によって。



5 番・サード
第 5 期生 池谷 真剛
(主将)

優勝をもぎ取った!! そんな勇ましい感覚はなかった。ただ、その日一度も負けなかった。それが私の受けた正直な印象だ。メンバーと試合を楽しんでいるうち、気づいた時には優勝していたのだ。けれども、それが勝因だったのかもしれない。他のどのゼミよりも試合を楽しみ、助け合ったのが小野ゼミだった。あの時の盛り上がりは、ゼミ HP からにもにじみ出ているとおおりである。濃密だった小野ゼミの生活の中でも、忘れられない 1 日であった。



6 番・セカンド
第 5 期生 有吉 智彦
(悪球打ち)

六郷土手…。駅中。駅近。東京都大田区仲六郷 4 丁目にある京浜急行電鉄本線の駅。東京 23 区内の最南端の駅で杖と赤白帽のおじいちゃんと散歩した。1 階の駅構内に、トイレ、コインロッカー、自動体外式除細動器 (AED) が設置されている。このように、いつでも緊急救命できる体制が整っていることは、現在の社会問題でもある高齢化社会への配慮であり、このような人への思いやりの気持ちを忘れずに生きることが出来るのなら、世界は平和へと導かれる。そのようなことを考えて、私はソフトボールの試合が繰り返されているグラウンドに向かった。試合は熱すぎた。暑いのは当たり前だが、心が熱くなるのは久しぶりだった。グラウンドにあるボール 1 球と選手が燃やしている玉を合わせれば 19 球にもなる球が揺れに揺れた。人間という、原子によって構成された動物が核融合をし始め、高温な熱を発生し、相手のチームを食いつぶすような勢いで襲いかかった。優勝した。感動した。熱かった。1945 年 4 月 15 日太平洋戦争による京浜空爆によって六郷土手駅が全焼されたことを思い出しつつ。



7番・ファースト
第5期生 石崎 克典
(小野ゼミの徳井)

あのソフトボール大会は、ゼミ生活の中でも鮮明に記憶に残っている。本当に個性の強いみんながあそこまで一致団結して1つの目標（あの日は勝利だったわけだが）に向かって頑張ったなんてことは、あの日が一番だったのではないだろうか。必死にボールを追いかけたり、必死にホームを目指したり…。すごく疲れたけど、すごく楽しかったのを覚えている。楽しかったうえに「優勝」というおまけつきで、本当に自分は幸せだと思った。

体育会の人がいるわけでもないし、経験者が特別多いわけでもない小野ゼミが優勝できた理由をこの際に考えてみると、ありきたりかもしれないが、「どこここにも負けないチームワーク」があったからだろう。小野ゼミのチームワークはマジでダントツだったと思う！

非力なバッティングと不安定なファーストの私をレギュラーとして使ってくれてありがとうございました！！



8番・レフト
第5期生 鷲見 卓也
(GG.鷲見)

気がついたらいつの間にか決勝の舞台にいた。そして激闘の末の優勝。チームの皆が野球経験者ではなく、むしろ大半のメンバーが野球未経験者でありながら、優勝を勝ち取れたことには非常に価値があると思う。これは一重にチームワークの賜物であろう。小野ゼミの皆は普段バラバラなのに、何か一つのことにいざ取り組むとなると素晴らしいチームワークを発揮する。試合に出て奮闘するメンバー、外野で声援を送るメンバー。一人一人の力が一つになったからこそ勝ち得た勝利を本当に嬉しく思う。

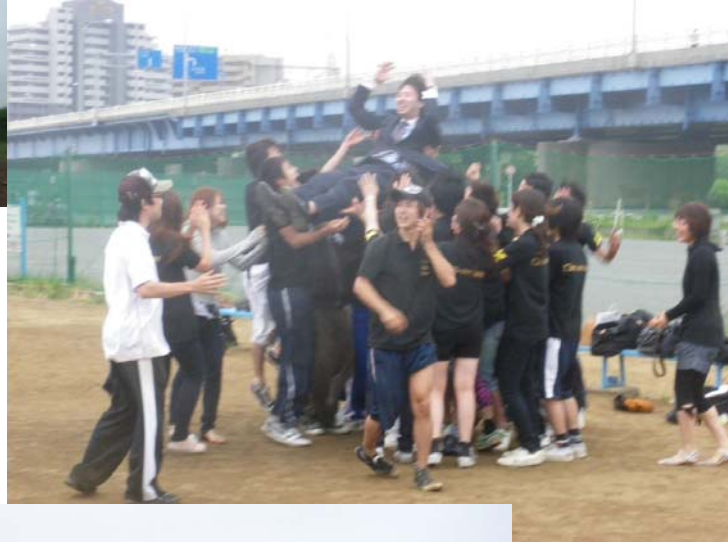


9番・キャッチャー
第6期生 小早川 景光
(決勝戦サヨナラ打)

「小早川～！！お前本当に野球経験者か～！！」そんな罵声がソフトボール大会1日目のグラウンドには響いた。正直、ソフトボール大会はお遊びくらいにしか考えていなかった自分にとって、5期生のソフトボール大会への意気込みは衝撃的だった。そのとき感じたのは、小野ゼミは1度やると決めたら必ず1番を目指すDNAがあるのだと。久しぶりに本気でスポーツをやろうと思った。このゼミならひょっとしたら…まだグループリーグを突破したばかりだがそんな予感がした。決勝リーグの小野ゼミは圧巻の一言だった。逆転に継ぐ逆転で、勝利を重ねていく小野ゼミ。毎試合毎試合優勝したかのように大騒ぎしていた。そして、決勝戦。優勝した瞬間自分は1塁ベースを回っていた。小野先生が胴上げされている優勝の輪に加われなかったのが心残りだが、最高の気分だった。小野ゼミに入ってよかった。毎試合どんなゼミよりも応援の数が多かった小野ゼミの一体感はすごかった。次回大会は、主力の5期生がいなくなって寂しくなりますが、7期生と共に連覇を目指したいです。小野ゼミ最高！！



応援団長松山



感動の胴上げ



優勝記念写真



小野ゼミベストナイン